

No.145

2017.4.25

朋友だより

朋友だより 145 号をお届けします。

戦後 70 余年、待ちに待った国連での核兵器禁止条約会議が
開催されました。

「人類の進歩」という言葉の意味を一層実感しました。

ご参考になれば幸甚です。

2017年4月

(有)コンサルタント朋友
代表取締役 奥 長 弘 三



人類の進歩への貢献



核兵器禁止条約の国連会議

今年の3月27日から31日までの5日間、国連で核兵器禁止条約の国連会議が開催されました。広島・長崎の悲劇から72年、被爆者の方々が訴え続けてきた声やと国連を動かしたのです。戦後の歴史で初めての核兵器禁止条約に向けた、多国間の国際交渉とのことです。

参加国は115ヶ国を超え、国連参加国の圧倒的多数の参加です。今回の会議の構成は各国政府代表と市民代表からなる新しい試みです。

米国、英国、フランス、ロシア、中国などの核保有国は不参加です。残念ながら日本政府も不参加です。日本政府は不参加の理由として、「核保有国が参加しないもつて禁止条約をつくることは、核保有国と非核保有国の分断を深める」と弁明しています。核保有国と非核保有国との橋渡し役こそ、唯一の被爆国である日本政府の役割だと思つてのですが、誠に残念なことです。

今回の会議の中心を担うのはオーストラリア、コスタリカ、アイルランドなどの「小さな国」です。特にコスタリカ出身の外交官のエレン・ホワイトさんは議長という大役を果たしました。

第二次世界大戦後の戦後世界で、かつて植民地だった国々が独立することで、国の大小による序列のない世界がスタートしたのですが、今回の会議はまさにそれを現実のものとして世界に示した形です。

米国の国連大使は会議の初日、他の国の大使とともに会場の前で会議に対する反対声明を読み上げるという出来事がありました。今までは、よく国際会議などが開催された場合、NGOの代表などが議場の外でサイド・イベントを行うことがありましたが、今回は、NGOは各国政府とともに議場の中にあつて会議に参加し、米国が一部の国とともに議場の外で抗議するという形です。従来立場が入れ替わつたことに時代の変化を感じます。

日本からは被爆者を代表して、お二人が発

言されました。生後1年4ヶ月のとき広島で被爆された藤森俊希被団協事務局次長は、「私が奇跡的に生き延び、国連で核兵器廃絶を訴える被爆者の使命を感じる。同じ地獄をどの国の誰にも絶対再現させてはならない」と訴えました。

また同じ広島で被爆したカナダ在住のサーロー節子さんは、会議に欠席した日本政府に対し、「自分の国に裏切られ、見捨てられ続けてきたという被爆者としての思いを深くした」と強く非難しました。また交渉参加国に対し、「核兵器は違法で倫理に反すると宣言する条約の制定が皆さんの任務だ」と訴えました。

唯一の被爆国である日本政府の不参加は被爆者のみならず、各国の参加者から疑問視されました。被爆者の70余年にわたる苦難の活動の末にやつと開催された国連の会議に、日本政府は不参加を表明することで、歴史の前進を妨害する側に身を置いたことを、世界に発信したことになります。

今回の国連会議を機に、人類の進歩とは何かについて改めて考えてみました。いろいろ解釈があるでしょうが、究極のところ、一人ひとりが恐怖(特に死の恐怖)から解放され、心おきなく生活できること、そして一人ひとりの個性が尊重されること、これが人類のめざすものでしょう。日本国憲法の第13条「すべての国民は個人として尊重される」、これが実現されることが、人類の進歩といえるでしょう。

今度の国連会議は、世界中の人々を核兵器という死の恐怖から解放することですから、人類の進歩にとって画期的なものです。これに反対する大国そして唯一の被爆国である日本政府の道義的責任は強く追究されるべきものと考えます。

日本の現状をどう見るか

前項で見たように人類の進歩に対する逆流の立場に立っている日本政府の国内での政治はどうでしょう。このところ安倍政権の傍若無

人ぶりが目に余ります。

- ・沖縄辺野古基地建設での問答無用なやり方
- ・福島原発事故の収拾の目処さえついていないのに強引に進められる原発再稼働
- ・国民の内心の自由を縛る共謀罪の法制化のたくらみ 等々

法治国とは思えないやり方が横行しています。安倍政権の暴走政治に対抗する新しい市民運動が発展しています。特に安保法制、即ち戦争法に反対する戦いを通じて、国民一人ひとりが主権者として、自由な自発的な意思で立ち上がり、声を上げる戦後かつてない新しい市民運動、国民運動がわき起こり、豊かに発展しました。ここから国会内外で野党共闘がつくられ、今年の参院選ですべての一人区に統一候補を立て、そのうち11の選挙区で激戦を制して統一候補が勝利しました。

歴史を進めるものとそれへの逆流のせめぎ合いが現在の日本の政治状況といえます。

立憲主義、民主主義、平和主義を貫く新しい政治、すべての国民の「個人の尊厳」を大切にす新しい日本への道が展望されます。

日本の原点としての縄文文化

人類の進歩に貢献したいとの思いから、私達日本人の原点とは何かをいろいろ探っている過程で、大変興味深い本に出会うことができました。生物学者である若原正己氏の著書、『ヒトはなぜ争うのかー進化と遺伝子から考えるー』（新日本出版社 2016年1月）です。

同書によると、日本人の原点は縄文文化にあると言います。若干長いですが、同書からの抜粋です。

旧石器人はマンモスやナウマンゾウなどの大型哺乳類を追って、移動しながらの生活だった。それに対して縄文人は定住して食物を貯蔵し、食物の少ない冬に備える知恵を身につけていたようだ。(中略)

縄文人は先行する旧石器人に比べて、一段と高い文化を発達させた。野性的で、エネルギーに溢れんばかりの縄文式土器は日本各地から出土している。それに対して、少し洗練されたというか、上品な感じがす

るのが弥生式土器だ。

縄文時代は紀元前1万6500年～紀元前300年、弥生時代は紀元前300～紀元250年くらいだ。縄文時代が圧倒的に長く、1万5000年以上続いたのに対し、弥生時代はわずか600年程度だ。(同書P.88～89)

縄文時代の1万年の間は、殆ど大きな争いはなく、極めて安定した時期を過ごしたようだ。世界の歴史を見ても、1万年の長きにわたって本格的な戦争、組織的な人殺しの無かった時代は珍しい。人類と地球の将来のキーワードである持続的発展のモデル・ケースだろう。(あとがきより)

日本人は基本的には縄文、後に弥生人の血が混ざり、さらに他の人種とより合わさって出来たわけだから、縄文人の遺伝子が多く残っているはずだ。その縄文人の遺伝子には、本格的に「争う遺伝子」は少ないのだ。(中略) 世界の中で日本人の遺伝子の特徴をあげるとすれば、「戦争をしない遺伝子」「争わない遺伝子」が強く残っていると断言していいかもしれない。(P.110)

縄文人は本格的な農業を行わなかったにも関わらず、エジプト文明とほぼ同時代に青森県の三内丸山遺跡(紀元前3500年～紀元前2000年)に見られるような大規模な建造物を造った。驚くべき技術力だ。(P.91)

縄文文化の特徴として、食物の貯蔵、定住生活、土器の使用の3つをあげ、古代日本が世界に誇るべき伝統と言っています。

人間が他の動物と決定的に違う能力は「知性」であるといい、これがある限り、人類の未来は悲観したものではないという著者の最後の言葉は私達を勇気づけます。



若原正己著 『ヒトはなぜ争うのか ～進化と遺伝子から考える～』

(新日本出版社 2016年1月)

本書は今回のテーマ「人類の進歩への貢献」との関連で重要な問題提起をしています。本文中では縄文文化に関する紹介のみに限定しました。ここで改めて、本書の内容を紹介します。

人間とは何か、ヒトはどこから来て、どこへ行くのかを考えるのが本書のテーマです。著者の専門は生物学ですから、ヒトも間違いなく、生物の一種であり、生物進化の流れに乗っているという点を強調しながら、「人間とは何か」、「ヒトはなぜ争うのか」を考えます。(まえがきより)

ヒトと動物を分けるものとして教育がある。(同書 P.139)

本書で一貫して述べられている考え方です。

人間社会には、他の生物とは別の社会法則がある。ヒトは生まれつき生物として持っている行動パターンを変え、新しい社会を切り開き、よりよい世界をつくることができる。それが他の動物とは決定的に違うヒトの能力だ。

ヒトは生物学的に言って、「争う遺伝子」を持っているとはいえ、その発現を抑えることができる。社会的、政治的に言えば、民主主義を通じて多数派を形成し、国の仕組みを改革し、平和な世界をつくり出していくことができる。(P.189)

日本の太平洋戦争だけでなく、ヒトラー、ナチス下のドイツでも国民は教育と宣伝によって戦争に動員されていった。戦争を遂行するには、国民を思想的に動員することがどうしても必要で、その基本は教育と宣伝だ。(P.192)

ねじ曲がった愛国心に基づく戦争や憎しみの連鎖を断ち切り、復讐の繰り返しの悲劇を食い止めるには、どうしたらよいだらうか。野生動物とヒトとの違いは大きく発達した脳だ。ヒトはその巨大脳で言語を獲得し、思考し、思索し、情報のやりとりをし、相手と駆け引きをする中で理性を発達させてきた。この理性をもっと発達させ、動物的な感情を抑えることが大事だ。実に平凡な結論だが、これしかないのだ。

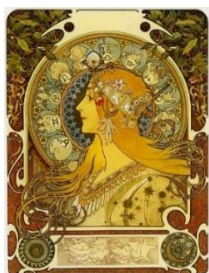
多様な価値観、多元主義、民主主義を基調とする教育に、地球の未来がかかっていると思う。(P.194～5)

特定秘密保護法が制定され、「戦争回帰」とも言えるような強権的な考えが、また復活しそうだ。(中略) 本書で一番訴えたいのは教育の力だ。勿論ヒトも生物の一種で、基本的には遺伝子に縛られているが、ヒトにはその遺伝子の縛りを克服する力があるということだ。(あとがきより)

～*～*～ あとがき ～*～

朋友だより 145号をお届けいたします。

ポスター画やカレンダーの絵で優美で流麗かつ華やかなアール・ヌーヴォーの女性像を描き、日本でも人気の高いアルフォンス・ミュシャ (チェコ語発音はムハ)。100年前パリで活躍したのち、スメタナの交響詩「わが祖国」を聴き晩年に故郷チェコに戻り、いかなる国の未来も過去の歴史を知ることにかかっている、自分も祖国の役に立ちたいとの想いで、渾身の大作『スラヴ叙事詩』を16年間の歳月を捧げて描き上げたとの事です。今、六本木の国立新美術館に於いて展示されております。(6/5迄)。今回、初めてチェコ国外に持ち出されたとの事で、歴史は一人ひとりの民衆が作っているのだとの彼の強いメッセージがスラヴ民族の壮大な歴史と共に描かれています。私は10年ほど前にチェコにツアー旅行中、プラハ郊外の美術館で鑑賞して以来の懐かしい再会でした。(野上)



朋友

有限会社 コンサルタント朋友
〒113-0022 東京都文京区千駄木 3-36-11
千駄木センチュリー-21 602号
TEL. 03-5815-3021 FAX. 03-5815-3022
e-mail foryou91@tokyo.email.ne.jp

URL:<http://www.consultant-hoyu.co.jp>